

ラーヘル・レヴィン・ファルンハーゲンとヘーゲルにおける婚姻と女性

岡崎佑香(立命館大学/学振PD)

ラーヘル・レヴィン・ファルンハーゲンは、一八〇〇前後に二度にわたってベルリンで最も著名なサロンを主宰したユダヤ人女性である。一七八九年から一八〇六年まで開かれていた第一期の彼女のサロンには、フンボルト兄弟、シュレーゲル、シュライアマハー、ティーク、フィヒテなどが集い、一八一九年から彼女が亡くなる一八三三年まで続いた第二期サロンにはヘーゲル、ガンズ、シュテフェンス、ハイネのほか、性別や年齢を問わず、また異なる信仰を持つ人々や異なる階級の人々が一堂に会し、文化や学問の最新のトピックについて批評し、意見を交わすことで、マルクスら若き世代の育成や激励が目指された場であったとされている (Dobre, 2020)。それゆえ、ブランドスは彼女をこの時代の「最も重要な」人物と評しており (Brandes, 1906)、ケイもまた「シュライアマハーやフンボルト、フィヒテやヘーゲル、ロマン主義や青年ドイツのベルリンの背後に〔アスパシアと〕同様の影響力を行使したもう一人の女性、つまりレヴィン・ファルンハーゲンの姿が垣間見られる」と述べている (Key, 1913)。実際に、レヴィン・ファルンハーゲンの夫ファルンハーゲン・フォン・エンゼがローゼンクランツに宛てた手紙には、レヴィン・ファルンハーゲンとヘーゲルが哲学的議論に興じていただけでなく、ヘーゲル自身がレヴィン・ファルンハーゲンを「思惟する女性」つまり女性哲学者と認識し、そのように彼女を遇していたことが記されている (Nicolin, 1971)。

ところが、従来の研究では、レヴィン・ファルンハーゲンの哲学的貢献はほとんど看過されてきた。たとえば、Nasser and Gjesdal 2021 は、いわゆる「長い十九世紀」のドイツにおける女性哲学者八名に光を当てた点で画期的だが、レヴィン・ファルンハーゲンについては未着手である。これに対して、Dobre 2020 や Keller 2024 によって彼女の思想が初期ロマン主義 (Frühromantik) とりわけシュライアマハーとの関連で明らかにされたが、ヘーゲルとの関連でレヴィン・ファルンハーゲンの思想を解明する試みは未だ十分になされていない。

そこで本報告では、まず一八二七年八月十六日にレヴィン・ファルンハーゲンが弟ロバルトに宛てた手紙に着目したい。というのも、その手紙のなかで、1) もともと彼女はヘーゲルの著作を、その文体を含め、評価してはいなかったこと、2) にもかかわらず、ヘーゲルがファルンハーゲン・フォン・エンゼに贈呈した彼の第二版『エンチュクロペディ』 (一八二七年) を彼女は今まさに読んでいることが記されており、3) しかも、この著作が「素晴らしい。ほとんど全ての行が反論の余地がない」とまで絶賛されているからである。

では、なぜレヴィン・ファルンハーゲンはヘーゲルの第二版『エンチュクロペディ』をそれ以前の彼の著作に比して高く評価したのだろうか。第二版『エンチュクロペディ』のどのような点が、それまでヘーゲル哲学に難色を示していた彼女の眼鏡に適ったのか。

以上が本報告の提起する問いであるが、わたしたちはこ

の問いに、ヘーゲル哲学における婚姻や女性についての議論の変遷という観点から迫りたい。というのも、第一に、すでに一定の量の先行研究によって、レヴィン・ファルンハーゲンは、ヘーゲル哲学のなかに「比較的進歩的な女性観」を見出していたことが明らかにされているからである (ex. Moland, 2024)。第二に、彼女の二五五年の手記には、彼女のサロンに集った人々とヘーゲルとの間で交わされた「婚姻における夫の役割についての会話」(Wernli, 2021) が記されており、両者にとって婚姻という主題は争点の一つであったことが伺えるからである。さらに、第三には、晩年のレヴィン・ファルンハーゲンがリベラルな思想を展開した背景として、ヘーゲル自身や彼の著作からの影響が指摘されていることである (Jennings, 1876)。Guilloton が主張するように、レヴィン・ファルンハーゲンにとってヘーゲル哲学は「両性の平等に対する彼女の見解を支持する」ものであったのだ (Guilloton, 1987)。

以上の点をふまえた上で、一八二〇年に刊行された『法哲学要綱』と第二版『エンチュクロペディ』の婚姻論にいかなる異同があるかを明らかにしつつ、レヴィン・ファルンハーゲンの思想との類似点や相違点を詳らかにすることで、本論の提起した問いに一つの回答を与えたい。

参考文献

- Brandes, George, “Young Germany,” in: *Main Currents in Nineteenth Century Literature*, London: William Heinemann, 1906.
- Dobre, Catalina Elena, “Rahel Levin Varnhagen’s Philosophical Reflections on Moral Character, *Bildung*, and Sociability”, *Symphilosophie*, 2, 2020, 91-113.
- Guilloton, Doris Starr, “Toward a New Freedom: Rahel Varnhagen and the German Women Writers before 1848”, in: Goldberger, Avriel H. (ed.), *Woman as Mediatrix: Essays on Nineteenth-Century Women Writers*, Westport: Greenwood, 1987.
- Jennings, Vaughan, *Rahel: Her Life and Letters*, London: Henry S. King, 1876.
- Keller, Paula, “Rahel Levin Varnhagen (1771-1833)”, in: Gjesdal, Kristin, Nassar, Dalia (eds.), *The Oxford Handbook of Nineteenth-Century Women Philosophers in the German Tradition*, New York: Oxford University Press, 2024, 83-101.
- Key, Ellen, *Rahel Varnhagen. A Portrait*, New York and London: G. P. Putnam’s Sons, 1913.
- Moland, Lydia, “Feminist Philosophizing in Nineteenth-Century German Women’s Movements”, in: Gjesdal and Nassar (eds.), 2024, 424-446.
- Nassar, Dalia and Gjesdal, Kristin, *Women Philosophers in the Long Nineteenth Century. The German Tradition*, Oxford: Oxford University Press, 2021.
- Nicolin, Günter (Hrsg.), *Hegel in Berichten seiner Zeitgenossen*, Berlin: Akademie Verlag, 1971.
- Wernli, Martina, “Thinking and Writing Truth. Rahel Levin Varnhagen’s ‘Diaries’ and Philosophical Notes”, *Hegel Bulletin*, 43/3, 2021, 467-485.